

キリシタン資料における原因・理由を表す 接続形式

—ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に—

李 淑 姫

キーワード：キリシタン資料、接続助詞、ホドニ、包含関係、階層論

要 旨

キリシタン資料の中でも代表的な口語資料とされる天草版平家物語、天草版伊曾保物語、コリヤード懺悔録を対象に、これらの資料に用いられる原因・理由を表す接続形式に対して階層論的分類を試みた。その結果、キリシタン資料ではユエニ、ニヨッテ、トコロデ、アイダはB類、ホドニはC類に分類できるということがわかった。前稿(李 1998)によると大蔵虎明本狂言集ではトコロデ、アイダはC類に分類されるが、この違いは、因由形式の歴史的变化の一つの表れとして見ることができる。

0. はじめに

古代日本語の原因・理由を表す接続形式(以下因由形式)は已然形バの一つの形式に限られていた。これが中古日本語を経て中世になると、ホドニ、ニヨッテ、トコロデ、ユエニ、アイダなどの多様な形式が因由形式として用いられるようになる。これらの形式はいずれも前件と後件を原因・理由という意味関係で接続する。しかし同じ意味機能をもつ中でも、文体的、統語的に何らかの異なる役割を担っているということが、小林 1973、村上 1993、中沢 1996、李 1998 などの諸先行研究によって指摘されてきた¹⁾。

本稿では、『天草版伊曾保物語』、『天草版平家物語』、『コリヤード懺悔録』などのキリシタン資料の中で、これらの因由形式が文の構造とどのような関係にあるの

かについて考えてみる。またそれぞれの因由形式が、他の因由形式との関係の中でどのように位置づけられるのかについて考察する。結論的には、中世日本語における因由形式の多様性は、文の階層と密接なかわりを持っており、階層という観点から体系的にとらえられると考える。本稿で調べたキリシタン資料の因由形式と前稿(李 1998)で取り上げた大蔵虎明本狂言集の因由形式を比較した結果、因由形式の体系的変化の中で、前者が後者より前の状態を表しているということが分かる。

1. 考察の方法

キリシタン資料に現れる諸因由形式を体系的にとらえるために、①各因由形式が承接する前件の構造、②複数の因由形式が用いられるときはそれらの包含関係、という二つの要素を判断の基準とする。これは現代日本語の従属句における階層性に対する南 1974 の考察を取り入れたものである。南 1974 では、現代日本語の従属句をその構成成分によって、A 類、B 類、C 類の 3 種類に分類している。

(1) A 類：従属句の中に、述部の成分として使役の(サ)セル、受身の(ラ)レルなどが含まれる。述部以外の成分としては、対格のヲ、与格のニ、状態副詞までが含まれる。

B 類：A 類の従属句に含まれない否定のナイ、テンスの助動詞タなどが述部の成分として現れる。述部以外の成分として主格のガ、時の修飾語、場所の修飾語、程度副詞などが現れる。

C 類：B 類の従属句の成分として含まれない、推量の助動詞タロウが述部の成分として現れる。述部以外の成分として主題のハ、陳述副詞タブンなどが現れる。

そして、この A 類、B 類、C 類従属句の間には次のような「含み含まれ」関係が成立する。

(2) A 類、B 類の従属句は C 類の従属句の構成成分として C 類の従属句の中に含まれることができる。同じように A 類の従属句は B 類の従属句に含まれることができる。しかしその逆は成立しない。

南 1974 は従属句の段階分類を通して文の階層性を主張しようとしたものである

が、本稿ではこの階層論に基づいて、キリシタン資料の因由形式が体系的に整理されることを主張したい。本稿では南のいう「含み含まれ」関係を「包含関係」とよぶことにする²⁾。「包含関係」は同じ類に属する従属句の間にも何らかの傾向性があることを見せてくれる。南の論は前件、すなわち接続助詞が承接する従属句の構造をもっとも重視する立場であるが、本稿では、前件の構造からは同じ類に分類される因由形式も包含関係によってより詳しく分類され则认为る。

まずは本稿で扱うキリシタン資料の中では、どのような因由形式がどのくらい使われているのかをみてみよう³⁾。

(3)

	ホドニ	トコロデ	ニヨッテ	ユエニ	サカイニ	アイダ
伊曾保	12	35	90			
平家物語	63	49	181			2
懺悔録	1	32	33	2	3	

小林 1973 では、抄物とキリシタン資料、そして虎明本、虎寛本などの狂言台本における因由形式の使用状況を綿密に調査している。小林の調査によると、中世日本語の因由形式の史的变化の中で、ホドニとニヨッテの使用比率の変化が特に著しい。キリシタン資料では、抄物や虎明本に比べて、ニヨッテの勢力が著しく増加している。量的な側面に加えて、ニヨッテの前件、後件の使用状況の調査の結果、小林 1973 は「ニヨッテ使用の内容面からも、虎明本(虎清本)は、抄物時代より後でキリシタン資料より前、虎寛本はキリシタン資料以降の状態を反映していることになる」としている⁴⁾。しかしホドニ、ニヨッテの使用比率や用法という側面ではなく、本稿で考察する多様な因由形式の階層的観点からみると、キリシタン資料の方が虎明本より前の時代を表しているように見える。もちろん、狂言台本という虎明本の文体的性質から、資料全体の言葉に対してキリシタン資料が虎明本より前の時代を表すということはいえない。しかし因由形式の体系という観点からみた限りでは、虎明本の方により変化のすすんだ状態が現れていると考えられる。以下 2.ではキリシタン資料に現れる各因由形式がどのように分類できるかについて考えてみる。

2. キリシタン資料における因由形式の分類

2.1. ホドニ

(4)ある時シャントを知音のもとへ請待したに、その座でシャント妻のことを思

ひ出だし、エソポを呼び寄せ、座敷にあった珍物を取り揃へて、「これはいづれも賞翫の物ぢやほどに、持って行て、わが秘蔵大切にする者に食させい」と言はるれば、（伊曾保、420p）

(5)「このことは浅からぬ不審ぢやほどに、思案をして答へうずる」と言うて家に帰り、心を尽くいて案ずれども、さらに弁ゆる道がなかったによって、案じ煩うてゐるる体をエソポ見て、シャントに問ふは、（伊曾保、426p）

(6)さて少将は今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごひをして、泣く泣くそこをたたれた
（平家巻一、79p）

(7)きたる二十一日主上御元服の定めのために、関白殿御出あらうずるほどに、いづくにてもあれ、待ち受けてお供の奴ばらどもが警ことごとく切つて、資盛が恥をすすげ（平家巻一、16p）

(8)さりながら、天然その望みが起る時、貪欲・瞋恚・嫉みなんどの科になるほどの念が、身は見分けずしてとり混へたことも有らうほどに、デウスの御前に有る如くに顕しまらす（懺悔録、52p）

伊曾保物語のホドニには、前件の述部としてウ・ヨウが上接する例はみえない。また、「さだめて」などの陳述副詞もある例がない。前件の構造という観点だけから見ると、伊曾保物語のホドニは B 類に属するといえる。しかし、伊曾保物語と同時期の資料である天草版平家物語のホドニには前件の述部にウズルがくる例があり天草版平家物語のホドニは C 類に分類される。また懺悔録のホドニの例は一例しかないが、この例ではホドニが推量の助動詞ウを前件の述部に行していることから、ホドニは C 類として分類される。伊曾保物語のホドニは前件の構造からは B 類に属するといえるが、同時期の平家物語のホドニは C 類の用法をもっている。

2.2. ニヨッテ

(9)夏と秋の間には、吟曲にとり紛れて、少しも暇を得なんだによって、何たる営みもせなんだ（伊曾保、465p、蟬と蟻との事）

(10)真に過分に魚が入ってござるによって、我らが力では引き上げ難い
（伊曾保、466p、狼と狐のこと）

(11)あくれば六月ついたちのまだ暗かったに、清盛、資成といふ者を呼うで、院

の御所へ参れ：信業を招いて申さうずるやうは：夜な夜な近習のひとびとこの一門を滅ばいて、天下を乱らさうずると企てらるるによって、いちいちに召しとって尋ね沙汰いたさうずる：それをば君も知ろしめされまじと申せと、言はれたれば：（平家巻一、23p）

- (12)三位入道の嫡子仲綱馬ゆゑに面目を失はれたによって、この恥をすすがうずるとて謀反をおこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと（平家巻二、115p）

- (13)さりながら、今コンヒサンの覚悟の為に、その借の金を皆調へてござるによって、今日中に済しまらせうず（懺悔録、48p）

- (14)さりながら、今はもう早うち戻さうと思ひ定めまらしてござるによって御氣遣ひあるな（懺悔録、16p）

- (15)これはもう七・八年のことでござるによって御推量めされよ（懺悔録、36p）

伊曾保物語には 90 例のニヨッテが用いられているが、前件の述部にウ・ヨウをもつ例はない。したがって、伊曾保物語のニヨッテは B 類になる。天草版平家物語、懺悔録においてもニヨッテの前件の述部にウ・ヨウがくる例はなく、したがってニヨッテは伊曾保物語と同じく B 類に分類される。三つのキリシタン資料におけるニヨッテの用法は B 類に相当する。

しかし、後件の構造に関しても三つの資料が同じであるかという、そうではない。伊曾保物語では、ニヨッテの後件として推量・意志、命令・依頼がくる例はなかった。平家物語では、ニヨッテの後件として命令・依頼が用いられた例はないが、(11)のように推量・意志が用いられた例がある。懺悔録では、(13)のようにニヨッテの後件として推量・意志の助動詞ウズが用いられており、(14)(15)でみるように命令・依頼表現なども使われている。階層論的観点からは、後件の構造は接続助詞の分類において積極的な意味をなさない。しかし後件として、推量・意志、命令・依頼が現れるようになるということは、その因由形式の用法に制約がなくなることであることであり、その因由形式がより広範囲に用いられるようになることを意味する。

2.3. トコロデ

- (16)ある時鼠のもとに蛙を招いて、種々の珍物を揃へて饗いたところで、その後また蛙も鼠を饗さうずるとて、招き寄せ、川のはとりに出て言ふは、

（伊曾保、442p）^{*5}

- (17)ある川端に、狼も羊も水を飲むに、狼は川上に居、羊の子は川裾に居た
ところで、かの狼この羊をくらはばやと思ひ、羊の傍に近付いて言ふは、

（伊曾保、443p、狼と羊の譬への事）

- (18)清盛日ごろにも似いで、もつてのほかにやはらいで、さてさて俊寛と、康頼
がことはなんとあらうぞと、言はれたところで、それをも同じく召し帰され
てようござらうず：もし一人なりとともどめさせらるるならば、なかなか罪
業でござらうずと、申されたれば：（平家巻一、71p）

- (19)そののち太刀をぬいて切ったが、三人切り伏せて、四人に当たるたびにあま
り甲の鉢に強う打ち当てて、目貫のもとからちゃうど折れて、川へざぶと入
ったところで、今はたのむ所の腰刀でひとへに死なうと狂うた

（平家巻二、127p）^{*6}

- (20)我は御覧ぜらるる如く、若い者でござって、その上キリシタンの形儀もまだ
しかと身に付かぬところで、常の友も同類の者でござれば、御推量させられ
よ（懺悔録、42p）

- (21)さらば、か様なる数々の深い科の御赦し、デウスの無量・広大・無辺の御慈
悲の為にはいと易いことちやところで、その分心得あれ（懺悔録、58p）

トコロデは、ニヨッテと同じく、前件の述部にウ・ヨウがくる例がない。これは
三つのキリシタン資料の中で同じである。キリシタン資料でのトコロデの用法は B
類的とみることができるだろう。しかしその後件の種類をみると、伊曾保物語、平
家物語の二つの資料と懺悔録とで差がでてくる。前者の二つの資料で、トコロデは
後件に推量・意志、命令・依頼がくる例がない。しかし懺悔録では、その後件に命
令・依頼の表現がくる例がある。本稿では、ニヨッテの場合と同様に、この違いを
因由形式が変化していく過程の一つの表れとしてとらえたい。すなわちトコロデは
ニヨッテの場合と同じく、時がたつにつれて後件における制約がなくなり、漸次そ
の用法を拡大していったということである。

以上、キリシタン資料で主に使われている三つの因由形式ホドニ、ニヨッテ、ト
コロデが階層論的にどの類に属するのかをみてきた。以下ではユエニ、サカイニ、
アイダについて考えてみる。この三つの因由形式は資料における分布が偏っている
だけでなく、数も少ないので比較することは難しいが、一応その中でどのように分
類できるかを見てみよう。

2.4. ユエニ(懺悔録の2例)

- (22) 某が今年デウスの御慈悲の上よりキリシタンになりまらしてござる故に、まだコンヒサンを申さいでござる (懺悔録、4p)
- (23) その御主はデウスでも御人でもござる故に、デビニダデの御所には似合わぬことどもは、喩へば、不犯の女ビルゼンサンタマリアと申し奉るに生れ給ふこと、 (懺悔録、10p)

2.5. サカイニ(懺悔録の3例)

- (24) これは三度でござったに、一度は神・仏に掛けてかう致すまいと誓文立てと言ひ付けられたさかいに、身は神・仏は荷に立たず、本の誓文の題目でないところで、ついでに逃げいでも大事あるまいと存じて、ゼンチヨの奉行を付る為ばかりに立てまらした (懺悔録、56p)
- (25) とかくそのお奉行キリシタンのことをうち崩いてからは、そのまま上罷り上られてござるさかいに、何もえ致しませいで、今までこの分に罷り居るが、御異見を頼みまらす (懺悔録、18p)

2.6. アイダ(平家物語の2例)

- (26) 都の大将をば宗盛といひ、討手の大将をば権亮と言ふあひだ、平家をひらやと読みないて (平家巻二、154p)
- (27) 熊谷思ふやうは：ただ今この人討たねばとて、源氏勝たうずる軍に負けうでもなし：討つたればとて、それにはよるまじいと思うたれば、助け奉らばやと後をかへりみるところに、味方の勢五十騎ばかり来るあひだ、熊谷助けたりとも、つひにこの人逃れさせられまじければ、のちの御教養をこそつかまつらうずれとて、御首をかいでのちに聞けば、 (平家巻四、277p)

上の諸例によってキリシタン資料のユエニ、サカイニ、アイダの三つの因由形式はいずれも B 類に分類されるが、その例が少ないことから、断定することは難しい。このような場合こそ、他の因由形式との包含関係からより確実な分類の結果を得ることができると思われるが、ユエニ、アイダに関してはそのような例がないのでこれ以上論を進めることは難しい。サカイニに関してはニヨッテとの包含関係が一例

だけあるが、これに関しては3.3.で考察する。

以上、前件の構造という観点から、キリシタン資料の因由形式の分類をしてきた。李 1998 では階層論の観点から虎明本の因由形式がどのような体系になっているのかを考えてみたが、その結論と本稿での結論を表にしてみると、以下のようになる。

(28)キリシタン資料と虎明本の因由形式

	ユエニ	ニヨリ	ニヨッテ	トコロデ	サカイニ	ホドニ	アイダ
伊曾保			B	B		B ⁷⁾	
平家物語			B	B		C	B
懺悔録	B		B	B	B	C	
虎明本	B	B	B	C		C	C

キリシタン資料では、トコロデ、アイダが B 類として分類されるところが虎明本と異なるが、アイダに関しては用例も少なく包含関係の例もないので、虎明本と確実に区別できるということを主張しにくい。アイダに比べてトコロデに関しては、3.2.でみるように、ニヨッテとの包含関係からも B 類であるということが積極的にいえそうである。以下ではキリシタン資料に現れる包含関係から、上の表の分類についてさらに考えてみる。

3. 包含関係からみるキリシタン資料の因由形式

3.1. ニヨッテとホドニ

この例は伊曾保物語で 1 例、平家物語で 3 例みられる。いずれもホドニ句がニヨッテ句を含む関係であり、その逆の例はみられない。

[[ニヨッテ]ホドニ] 4 例

(29)ある時、かの獅子王山中で毘に掛かり、進退ここに窮まったによって、声を上げて叫ぶほどに、件の鼠が聞き付けて、急ぎそのほとりに走り来て、獅子王に礼をないて言ふは、（伊曾保、452p、獅子と鼠の事）

(30)この兩条は前代未聞の狼藉でござるによって、罪科に行はせられいではかなはぬ儀ぢやほどに、官位をもはがせられいではかなふまじいとまっくろに訴へられた（平家巻一、8p）

(31)宮の御謀反すでにあらはれさせられたによって、官人どもがただいまお迎ひ

に参るほどに、急いで御所を出させられて、三井寺へ出でさせられい：

(平家巻二、108p)

- (32) 木曾といふところは信濃にとっても南の端で、美濃の国の境ぢやによって、都へもむげに近かったほどに、平家の人々洩れ聞いて、これは何とせうぞと言うて、みな騒がれたれば、(平家巻三、157p)

ここで現れる包含関係は[[ニヨッテ(B類)]ホドニ(C類)]のようにとらえられる。このことから、2.1.でB類とした伊曾保物語のホドニもC類としてみるべきであろう。

3.2.ニヨッテとトコロデ

ニヨッテとトコロデとの包含関係は全部で8例みられる。この中では、[[ニヨッテ]トコロデ]が5例、[[トコロデ]ニヨッテ]が3例と二つの包含関係がみられる。

3.2.1. [[ニヨッテ]トコロデ] 5例

- (33) またある時、その主人外から帰られたれば、その膝に上り、胸に手を掛け、口を舐りなどして、いと馴れ馴れしい体であつたによって、主人いよいよ愛せられたところで、驢馬この由を見て、羨む心が起ったか、「我もあのごとくにして愛せられう」と思ひ、(伊曾保、451p、狗と馬の事)
- (34) いづれも武具を揃へ、こともおびたたい合戦になって、鼠は伏草をし、蛙を悩ませども、蛙は少しも臆せいで、いかにもうち現れ、咽笛を怒らかいて、大音を上げて、喚き叫んで戦ふによって、その戦ひと叫びの音は、ことも業山にあったところで、これを片脇から鳶が見て、「よい幸ひかな」と思うて両方ともに取つてくらうた。(伊曾保、499p、蛙と鼠の事)
- (35) 鳥羽の院なほ御感のあまりに内の昇殿を許されたによって、忠盛三十六の年はじめて昇殿いたされたところで、公家たちがこれをそねみ憤つて、同じ年にある時、忠盛を闇討ちにせうずると談合せられたを忠盛も伝へ聞いて思はるるは：(平家巻一、4p)
- (36) 宮のおんくびは宮のおん方へつねに参りかよふ人がなかつたによって、見知りまらしたのものもなかつたところで、定家といふ医師が一とせ御療治のために召されたれば、さだめてそれが見知りまらせうずというて、呼ばれたれど

も、所労と申して参らなんだれば、（平家巻二、136p）

3.2.2. [[トコロデ]ニヨッテ] 3例

(37) また三番目の陣から四番目まではそのごとくにして通いて、約束をしたことなれば、五番目でひたと受けとめて、敵を中にとりこめて、前後から一度に関をどっとつくったところで、行家今はのがれうずるかたがないと思はれたによって、命も惜みず、面もふらず、ここを最後と防ぎ戦はるるを、
（平家巻三、217p）

(38) このことがまた天下に聞こえ渡ったところで、関白殿をはじめて、そのほか都にゐられたほどの公家たち総じて世に人とかずへられ、官、位に望みをかくほどの人は一人ももれず、やがてみな比叡の山へまゐられたによって、法皇の御所になった寺には家のうちにはみな人がゐあまって、庭から門外までびっしと満ち満ちてゐたところで、比叡の山の繁昌門跡の面目と見えてござった（平家巻三、197p）

上の例からみるように、相互に包含関係をもつことからニヨッテとトコロデは同じ類に属していることがわかる。2.でみたようにキリシタン資料の因由形式は、ニヨッテがB類、トコロデがB類に分類された。包含関係も[[B類]B類]のようになっていると考えられる。

これに対し虎明本では、トコロデの前件の述部にウ・ヨウが用いられており、トコロデはC類に分類される。

(39) (太郎冠者)さて刀に手をかけさせられう所で、あれがまづこなたへとりつきまらせう、其間にがんをわたくしが取て参らふ（虎明上 169p、雁盗人）

(40) (子)一つたべてみたひが、定て数がさだまつてあらふところで、おやじや人のあづかられたにしかられう（虎明下 56p、かうじだわら）

このようにトコロデについていえば、キリシタン資料のトコロデは虎明本のトコロデのようなC類の用法は包含関係からも認められなかった。

3.3. ニヨッテとサカイニ

[[ニヨッテ]サカイニ] 1 例

- (41) さりながら、一度の為事をせずば大事なる損に逢はうずるに窮っておちや
ったによつてさし延ぶることも得いで仕ったさかいに、あまり気に懸りまら
せぬ。(懺悔録、28p)

3 例あるサカイニの例から、サカイニは B 類に分類された。また、懺悔録のニヨッテ、トコロデの場合はその後件に推量・意志、命令・依頼がくる例があったが、サカイニの後件にはそのような例がない。前件と後件の構造からみると、サカイニはニヨッテ、トコロデと同じ B 類であり、またその中でも後件の用法に制約のある形式のようにみえる*8。しかし、1 例だけある包含関係の例では、サカイニがニヨッテを包含している。

4. まとめ

以上、キリシタン資料に現れる因由形式について、階層的観点から、前件の述部と形式間の包含関係という二つの基準によって分類を試みた。前稿(李 1998)での虎明本の分類と比較してみると、共通する点が多いが、特にトコロデの分類に違いがあることが注目された。このトコロデについては小林 1973 でも「上接語の種類もキリシタン資料以上に豊富になっており、その点、狂言の反映するトコロデの様相は、1600 年代にはいつてからのものようである」*9 との指摘があり、キリシタン資料よりも後の状態ととらえているが、本稿での包含関係からの分類によって、このことがいっそう確認できた。

また、今回調査した三種類のキリシタン資料の中でも、1632 年刊の『コリヤード懺悔録』は因由形式の用法にも違いがみられる。さらに、「ホドニ」が少なく「サカイニ」が現れることから、天草版二種の資料と区別する必要があるようである。

そして前稿でもふれた、後件の述部の制約と包含関係とのつながりについても、因由形式の体系的変化をみる手がかりとしてさらに追求していきたいが、それについては稿を改めて考えることとする。

注

*1 先行研究の詳細は李 1998 を参照されたい。

*2 本稿で扱う包含関係の捉え方などに関しては李 1998 参照。

*3 表(3)と関連しては小林 1973 を参照。ホドニに関しては時を表すか、程度を表すか、必然確定を表すかという解釈の違いから、トコロデに関しては偶然確定を表すか、必然確定を表すかという解釈の違いから、用例数に差がある。本稿では、トコロデに関しては、偶然確定の要素があっても、必然確定として解釈される場合は、数に含めることにした。

*4 小林 1973、38p

*5 (16)の例はトコロデの後件として意志がくるようにみえる曖昧な表現であるが、

珍物を揃へて饗いたトコロデ、蛙も[鼠を饗さうずる]とて、招き寄せ～
のようにトコロデ句の後件の述部を「招き寄せ」とみるのが妥当であろう。また(17)の例は、トコロデを必然確定より偶然確定のように解釈しやすいが、どちらにしても文の構造は次のように解釈できる。

狼は川上に居、羊の子は川裾に居たトコロデ、かの狼[この羊をくらはばや]と思ひ

*6 (19)の例は、

川へざぶと入ったトコロデ[今はたのむ所の腰刀でひとへに死なう]と狂うた
の構造になっている。

*7 伊曾保物語のホドニは B 類として分類されたが、他のキリシタン資料とニヨッテとの包含関係から考えると、C 類とみるのが合理的と考えられる。

*8 後件の用法に制約があるかどうかと、それが階層とどのような関係にあるかというのはもっと検討する余地がある。現代日本語では B 類に属するノデ、タメニ(原因・理由)の後件に推量・意志、命令・依頼が共起しにくいのに対して、C 類に属するカラにはそのような制約がない。また小林 1973 でも指摘しているように、抄物、キリシタン資料、虎明本などの中世口語資料に現れるニヨッテの後件はホドニに比べて推量・意志、命令・依頼がくる例が非常に少ない。B 類と C 類の因由形式の間では、後件の用法に差があるということが分かる。しかし、後件の用法に差があるということから、同類に属する因由形式間に階層を考慮ということが可能かどうかは議論の余地がある。また前稿(李 1998)では、同類に属する因由形式間にも包含関係に一定の傾向性があることから、このような包含関係が階層の一つの現われではないかと考えた。たとえば虎明本のホドニとトコロデとの間にトコロデがホドニに包含される([[トコロデ(C類)]ホドニ(C類)])傾向があることから、トコロデがホドニより「B 類寄りの C 類」とであると考えた。

後件の用法に関しては仮定条件を表す形式と確定条件を表す形式の間で振る舞いがちがう。本稿では確定条件を表す形式だけを考えている。

*9 小林 1973、32p

資料と使用テキスト

- 虎明本：『大蔵虎明本狂言集の研究』上・中・下、池田廣司・北原保雄著、表現社、1972、1973、1983
- 虎寛本：『大蔵虎寛本能狂言』上・中・下、笹野堅校訂、岩波文庫、1942、1943、1945
- 伊曾保：『エソポのハプラス 本文と総索引 本文篇』大塚光信・来田隆編、清文堂、1999
- 平家物語：『天草版平家物語対照本文及び総索 本文篇』江口正弘、明治書院、1986
- 懺悔録：『コリヤードさんげろく私注』大塚光信、臨川書店、1985

参考文献

- 大倉浩(1997)「語法・用語から見た『狂言記外篇』－三百番集本系の曲の位置付け－」
『文芸言語研究 言語篇』31
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 来田隆(1993)「洞門抄物に於けるホドニとニヨッテ」『近代語の成立と展開』和泉書院
- 小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94
- 小林千草(1994)『中世のことばと資料』武蔵野書院
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5
- 中沢紀子(1996)『『版本狂言記』における原因・理由を表す表現－「程に」と「によって」を中心として－』『学習院女子短期大学国語国文論集』25
- 永野賢(1952)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-2
- 松尾弘徳(1999)「天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句－ホドニとニヨッテを中心に－」『語文研究』89
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 南不二男(1997)『現代日本語研究』三省堂
- 村上昭子(1993)「『大蔵虎明本狂言集』における接続辞について－「間」「程に」を中心に－」『松阪大学女子短期大学部論叢』31
- 吉井量人(1977)「近代東京語因果関係表現の通時的考察－カラ・ノデを中心に－」
『国語学』110
- 李淑姫(1998)「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について－その体系化のために－」『筑波日本語研究』3

(2000年6月22日 受理)